



会議報告

第12回 WIN-Global 年次大会

The 12th WIN Global Annual Meeting

2004年5月18日～22日(東京, 柏崎, 広島)

三菱重工業(株)
(WIN-Japan 理事)

千歳敬子

WIN(Women In Nuclear)とは、原子力や放射線に関する分野で働く女性による国際的組織であり、その第12回年次大会が日本で開催された。海外から約60名、日本から400名(市民公開フォーラムへの一般参加者含む)が集い、講演やシンポジウム、会員同士の交流の場を通じて積極的に情報交換を行った。参加者の大半が女性という日本の原子力分野では希有ともいえるこの大会は、プログラム策定・運営がすべて開催国のWIN会員の手作りであるという点も、他の国際会議とは異なっている。

以下に年次大会のプログラムの概要を報告し、併せて、開催に至るまでの実行委員会による準備活動裏話も紹介する。

会議の内容

1. 開会・基調講演・総会

すべてがWIN-Japan 会員の手による年次大会は、国内外の関係者(ほとんどが女性)が埋め尽くす東京ドームホテルで、華やかなムードの中でスタートした。

小川順子氏(WIN-Japan 会長)、ア

ニック・カルニノ氏(WIN 会長)、木元教子実行委員長(原子力委員)の歓迎挨拶に続いて、「岐路にたつ日本のエネルギー政策」と題して加納時男氏(参議院議員)の基調講演があった。自ら準備されたバロック音楽をバックに、エネルギー基本法制定、日本における原子力発電の役割、原子力による水素社会への期待等が紹介された。続く名取はにわ氏(内閣府男女共同参画局長)の講演では、「動き出した日本の男女共同参画」というテーマで、男性・女性が共に協力しあって築きあげていく社会の形成に向けて1999年に制定された基本法と目標値の設定、社会的整備の状況、今後の展望が述べられた。

総会では、今後の活動においてWINのWeb Site¹⁾を活性化させ、各国のWIN会員の活動を紹介し、会員がRole Model(理想像)を見い出せる環境を整えることとなった。欧州のWINでは、EU議会の議員に対するレクチャーでも会員が活躍している状況が報告された。またWIN理事会で次期会長としてWIN-Japan 会長小川順子氏が推薦され、総会において正式に承認された。さらに、次回の年次大会の

開催国として立候補していたチェコ共和国が、総会で正式に次回開催国に決定した(2005年4月4～8日。Cesky Krumlov)。

2. 技術講演

松原純子氏(前原子力安全委員長代理)による「原子力のリスクと安全目標」では、安全目標検討の動きが紹介され、原子力利用に対する一般からの不安・不信を取り除くために、公衆の視点にたった説明がなされているか、民主的な手続きが行われているか、等を原子力関係者が今一度自問するべき時であると締め括った。続いて、大西典子氏(三菱重工業)から、「原子力産業で活躍するロボットたち」というタイトルで、作業員の被ばく低減のために原子力施設内で使用されるマニピュレータタイプのロボットの紹介があった。さらに、原子力施設向けのロボット開発の応用で、現在は一般家庭向けのロボットが開発されている状況が報告された。

3. 各国 WIN 活動報告

参加国が増えて報告時間が確保できな



参加者一同

いたためか、ここ数回の年次大会では各国の活動状況はレジメの配布に留まっていた。今回は、「海外の情報は各国の会員から直接聞きたい」との WIN-Japan の希望で、参加した16の国と地域(オーストラリア、チェコ、フィンランド、フランス、インドネシア、日本、韓国、パキスタン、フィリピン、スロバキア、スペイン、スウェーデン、スイス、台湾、米国、ベトナム)の会員が約10分ずつ、昨年1年間の活動報告を行った。

4. キーノートセッション

小川益郎氏(日本原子力研究所)から、「高温ガス炉による水素製造研究開発」と題した最新の研究状況報告があった。高温ガス炉の特性、水から水素を製造する熱化学法 IS プロセスとその実証試験状況の報告には、多くの会員が原子力の新しい利用法として大いに興味を示した。一方で、海外会員から日英通訳者に対して「水素を Energy Source と訳したが、水素は2次エネルギーであって1次エネルギーではないので Energy Carrier である。注意して使ってほしい」との鋭い指摘もあった。

5. テーマ別 技術セッション

3つの会場に分かれて「アジアにおける原子力開発」、「放射性廃棄物問題」、「コミュニケーション」、「最新の原子力技術」、「原子力教育・普及活動」等のテーマごとに講演とディスカッションが行われた。日本からの参加者は、広報関係者が圧倒的多数であったため、「コミュニケーション」、「原子力教育・普及活動」のテーマに大勢の参加があり、活発な意見交換がなされた。

6. 国際市民フォーラム

今大会の特徴である国際市民フォーラムには、全国の原子力立地地域の女性をはじめ約300名の一般市民と WIN 関係者160名が参加した。木元教子氏をコーディネータに迎え「21世紀のエ

ネルギー、原子力は選択されるか」というインパクトのあるテーマを掲げ、ゲストパネリスト蟹瀬誠一氏と5名の WIN 会員によるパネルディスカッションが行われた。パネリストの1人アンネリ・ニクラ氏(フィンランド、テオリスーデン・ボイマ社(TVO)副社長)が、本テーマに対して「科学者として、また孫をもつ祖母として、将来必ず彼らは今我々が原子力開発を継続したことに対して感謝するだろう」と信念を持って答えた姿が印象的であった。

後半の会場とパネリストとの意見交換では、多くの女性から積極的に質問が出て時間内で対応しきれないほどであった。質問の内容は多岐にわたったが、発電所と民家との距離、原子力に関する教育などそれぞれ各国と日本との違いに関する情報を、直接海外の会員に求めるものが多かった。フォーラム後には会場ロビーでワインとチーズを片手に、一般参加者と WIN 会員が交流できる場を用意し、大変好評であった。

7. テクニカルツアーおよび 広島ツアー

WIN 会員向けに東京電力(株)柏崎刈羽原子力発電所と BWR 運転訓練センターを見学するテクニカルツアー、および広島の放射線影響研究所、原爆資料館等を訪問する広島ツアーを実施し、それぞれ約60名、40名の参加があった。海外の WIN 会員は8割が研究者やエンジニアであり、実際にプラントの運転を行っている会員も多く、発電所や訓練センターでも細かく技術的な質問が数多く出ていた。広島ツアーでは、平和公園で WIN 会員を代表してカルニノ前会長と小川新会長による献花が行われ、原爆の犠牲者の冥福を祈った。また、広島ツアーの懇親会(年次大会の最後の夜)では、参加者全員で三原地方に伝わる「やっさ踊り」を踊って交流を深めた。海外参加者にとっては大変印象的だったようで、フィンランドからはさっそく「関係者にレポートするので踊りの名前を確認

したい」と連絡してきた。今後、北欧の原子力関係者と交流機会がある学会員各位には、ぜひ「やっさ踊り」をマスターされることをお勧めしたい。

準備活動～閉会・その後

年次大会の日本開催は WIN-Japan 会員の長年の夢であったが、開催地に決定してから開会までは茨の道であった。参加者数が予測できない、運営資金がどれだけ集まるかわからない、WIN 会員の人海戦術でどこまで対応するのか等、様々な問題を抱え、実行委員会のたびに重苦しい雰囲気にも包まれた。「やはり日本での開催は無理だったのか……一同、諦めかけた」とプロジェクト X のナレーションが頭をよぎったが、開催2ヶ月前(参加登録受付の開始後であったが)、多方面から協力を得られることが確定し、当初想定した規模で開催できることになった。

多くの作業が会議1ヶ月前に集中し、また当日も事務局である WIN-Japan は不眠不休で様々な作業をこなすことになったが、全員の驚異的な頑張りでも無事に終了することができた。広島ツアーの解散場所の羽田空港の出口では、WIN-Global 恒例の、1週間行動を共にした会員による別れを惜しむ Kiss & Hug シーンが繰り広げられた。参加者達から「良い会議だった」との感想をもらい、WIN-Japan は一つのプロジェクトを達成した充実感を味わうことができた。

また、国際市民フォーラムに参加した立地地域の女性たちからは今後、エネルギーや原子力に関する自主的な勉強会を立ち上げたいとの声も出ている。世界各国で活躍する WIN 会員の姿は、日本の女性達の心に確実に何かを残した。

¹¹ <http://www.world-nuclear.org/win-global/>
WIN-Japan の Web site は <http://www.win-japan.org/>

(2004年 8月23日 記)